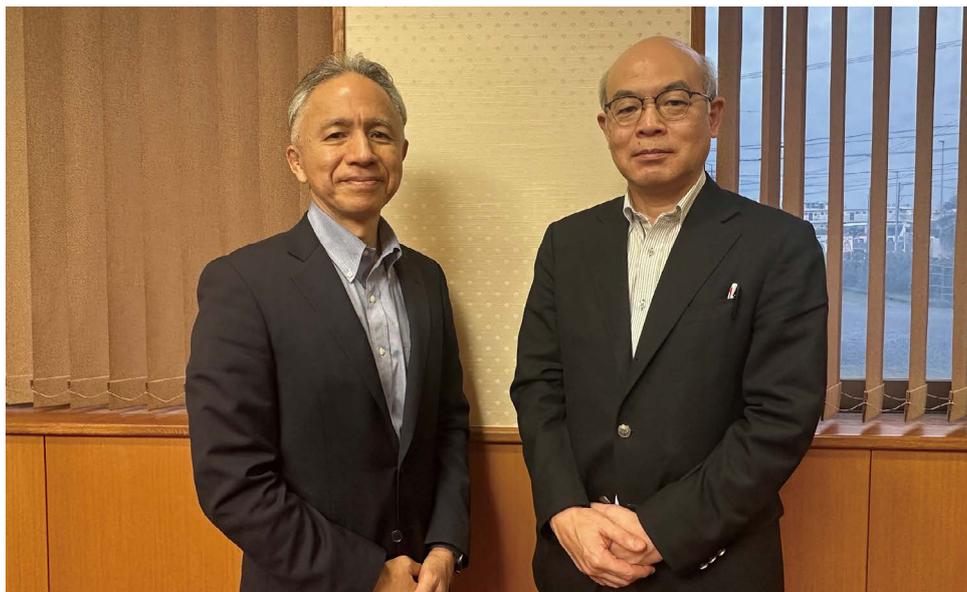


沖縄県立八重山病院 院長 田仲齊 先生



天願先生> 先生は、2025年4月から沖縄県立八重山病院 院長にご就任されております。遅ればせながらご就任おめでとうございます。

ご就任されてから、院長として、まず取り組んだことをお聞かせください。

田仲先生> ありがとうございます。

先生もご存じかと思いますが、当院では地域包括ケア病棟を立ち上げました。これは経営的な理由というよりも、地域に必要とされる回復期機能が不足しているという課題が、以前から明らかだったことが大きな理由です。

事実として地域医療構想で2025年時点、八重山区域の回復期の必要病床数が145床不足という数字が算出されています。当院はこれまでは急性期医療を中心に医療を提供してきましたが、八重山圏域の医療機関を中長期的に検討しても、回復期病床が明らかに不足すると判断

しました。そこで、地域のニーズに応えることを最優先に考え、地域包括ケア病棟の立ち上げを決断しました。

ただ、立ち上げのタイミングは決して容易ではありませんでした。直前の3月には病棟の再編を行い、いわば大きな改革を進めたばかりの状況で、さらに病棟機能を変更することになったため、現場には混乱や反対の声もありました。それでも、「地域のために一つになって取り組もう」と覚悟を決め、職員一人ひとりが自主的に動いてくれたことは、本当に大きな支えとなりました。12月からは実績づくりの段階に入り、現在は患者数も順調に増えてきています。この地域包括ケア病棟の整備が、今まさに取り組んでいる中で、最も大きな柱の一つです。

天願先生> たしか、先生は自治医科大学出身でしたね？

田仲先生> 平成3年に自治医科大学を卒業後、初期研修医として県立中部病院に入職しました。当時から「野戦病院」として日本中に知られていた中部病院でしたからそれはそれは毎日がハードでした。天願先生がちょうど一つ上の研修の先輩でした。「2年後には一人で何でもできなくちゃいけないぞ」とインターンには手強い診療や処置なども、天願先生をはじめとした諸先輩に手ほどきを受けながら2年間を忙しくも充実した研修生活を送ることができました。

私は母の実家が座間味島です。幼少期に里帰りして船の上から水底をのぞくとまったくの透明の海で、まるで船が宙に浮かんでいるような錯覚に陥りました。「こういうところで仕事ができたらいいな」と何となく心にずっと留めていたところ、進学を進路を考える際に自治医大の制度を知りこれだ、と膝を打って受験をしたという事情があります。

中部での研修を終え、最初に赴任したのは座間味島でなく、隣の阿嘉島でした。人口300半ばという小さな島ですから患者さんやその家族などの背景など、すぐに頭に入ります。そこで病気だけでなくその人の生活や生きてきた歴史などを丸ごと診療する、という診療所のスタイルにすっかり魅了され、いわゆる自治医大の義務といわれる年限を過ぎても診療所に残ってしまいました。生活面の不便はいろいろあったのですが、家内をはじめ家族でその不便を楽しんでいるところがあったので、長く離島生活を過ごすことができたのかもしれない。

ただ、離島で診療をしていると学会やお休みをとるにも代診をお願いしないといけません。当時の那覇病院の先生もかなりお忙しくされているところ、お願いをするにも診療所に出かける分、業務負担が増え、先生のせっかくのお休みを離島に来てもらうことに申し訳なさを感じることがしばしばありました。そこで県立の離島診療所の数にプラス2名の医師を配置してくれないか。当時にその制度を「ドクタープール」と名付けました。その2名の医師が診療



所の代診として離島に行く。そして診療所医師はお休みをとってもらう。そういうシステムを作ってくれと診療所に赴任当初からいろいろな方をお願いをしていました。反応は大抵のところ薄かったのですが、当時の中部病院宮城良充先生は「ほうほう」という感じで真面目にこちらの話を聞いていただいたのをよく覚えています。

そうこうしているうちにタイミングが合ったのか平成14年に診療所代診の医師に予算がついた、言い出しっぱなしの田仲、お前がやらないか。という話しが来ましたので、診療所を離れて県の保健医療部と中部病院の救急センター付けの勤務に移りました。救急センターに勤務となったのは病棟や検査などの業務がなく何時でも代診に行けるように、という配慮からでした。私たちは制度の第一期生として代診業務は離れましたが、現在は中部病院の幸喜先生を中心にしてドクタープールが受け継がれていることは非常に心強い限りです。

県立病院にはそれぞれの診療所があります。地域ごとに医療事情が異なります。診療所と病院、病院と沖縄本島との距離など環境なども異なります。代診医師になってそれらを俯瞰することが必要となり、一離島に勤務していただだけでは知ることのできない視点や視野が必要になったことが今の職位につながっているのかと感じています。

ここまでの自分にとってキャリアの大部分を診療所に関わる業務をしてきましたので、いつ

かは診療所に帰りたい、という気持ちが今でもあります。

天願先生> 離島の病院として、雰囲気づくりなどで工夫されていることはありますか？

田仲先生> 八重山病院は、北部や宮古と同様に職員規模が大きくなく、アットホームな雰囲気が特徴です。大規模病院に比べて職種間の垣根が低く、事務方とも率直に話し合える良さがあり、そこは大病院にない利点だと思っています。

私が心がけているのは、患者さんや職員に関わらず、挨拶をすることです。こちらから挨拶をすると最初は「なんだこのおっさんは」という目で見られましたが、今では若い方からも返事が返ってくるようになり、嬉しかったですね。

天願先生> 地域（島）での生活の中で、本島との違いを感じることはありますか？

田仲先生> 管理者になると、最前線の臨床医ほど患者さんと触れ合う機会が少ないのですが、本竹局長のアドバイスもあり、毎週月曜日の朝に玄関に立って挨拶をしています。透析に通う方や外来の患者さんに顔を覚えていただくようになってきましたが、まだPR不足だとも感じています。

生活面ではまったく不自由はないのですが、八重山病院で医療を完結できない患者さんにはどうしても沖縄本島へ搬送せざるを得ないケースが生じます。搬送時間の調整や天候待ちのときなどに沖縄本島との距離を感じます。

天願先生> 田仲先生が目指す病院運営方針、地域の開業医や他の医療機関との連携について、これまでの状況と今後先生ご自身が進めていきたいことについてお聞かせいただけないでしょうか。

田仲先生> 歴代の院長や管理職の方々が築き上げてこられたネットワークは、非常にしっ



かりしていると感じています。

八重山地域では、回復期病棟や介護施設を有する病院など、それぞれの医療機能が比較的明確に分かれており、その点では連携が取りやすい環境にあると思います。

現在も医師会員の先生方を含め、地域の病院の連携は行っていますが、コロナ禍を経て、やや関係が疎遠になっている部分があるという声も聞こえてきます。そのため、これを改めて再構築し、さらに発展させていきたいと考えています。

また、当院では複数の離島診療所を抱えていますので、緊急時やコンサルテーションなど、いつでも迅速に対応できる体制・システムをこれまで以上に整えたいと思っています。

私自身が自治医科大学卒で診療所出身ということもあり、地域医療機関との連携は非常に重要だと考えていますので、今後もこの点を大切にしていきたいと考えています。

天願先生> 先ほど離島の診療所のお話がありましたが、八重山は宮古などと比べても、離島や本島から離れた場所にある診療所が多く、医療提供体制に独自の特性があると思います。

こうした離島診療所などを含め、地域医療への取り組みや、診療所との関係性について、今後さらに強化していきたい点があれば教えてください。

田仲先生> 私が八重山病院に赴任して、まず驚いたのが「当院の診療所がある西表や小浜

のような離島は「二次離島」と呼ばれる」という考え方でした。沖縄本島からみて石垣が一次離島という概念がある。さらに石垣島自体が一つの拠点となり、その先に二次離島がある、そういう構図なのだと理解しました。

この考え方は、沖縄本島と周辺離島の関係にも応用できると思います。小さな離島もあれば、宮古・八重山も一つの離島医療圏と捉えることができ、八重山で離島医療を支える仕組みをしっかりと構築することは、沖縄全体、ひいては日本全体にも応用できるモデルになるのではないかと考えています。

人の行き来や医療システムの連携がうまく構築できれば、「沖縄モデル」として全国のモデルケースになり得るのではないかと、そういう可能性を感じています。

コロナ禍では、公立・民間といった枠を超えて連携できたことが大きな強みになりました。そうした経験を踏まえ、県立病院である八重山病院が中心となって、離島医療を守り、さらに築き上げていくことが重要だと考えています。

日常的な取り組みとしては、診療所とは月に2回程度、Webでのカンファレンスやミーティングを行い、不満点や課題、さまざまな相談をこまめに共有しています。これは私ではなく、與那覇副院長がこれまで築いてきた仕組みですが、ぜひ今後も継続していきたいと考えています。

また、地域の医療機関の先生方とも、定期的あるいは必要に応じて顔を合わせる機会を持ち、オンラインだけでなく、可能な限り対面での交流も含めて、関係性を深めていきたいと思っています。

天願先生> 先生は、自治医科大学をご卒業後、中部病院で研修を経て、実際に離島医療を何度も経験されてきたと思いますが、そうしたご経験が、現在の地域医療や連携の考え方に生きていると感じていらっしゃいますか。

田仲先生> そうですね。やはり「顔が見える関係」というのはとても大切だと感じています。

実際に相談できる先生がいて、電話の声や紹介状の文字だけでなく、「あの先生だ」と顔が浮かぶことで、やり取りが非常にしやすくなります。

院長クラスの医師が訪問するだけでなく、実際に診療に携わる課長や部長クラスの医師が、診療所やクリニックを訪問して挨拶をしたり、現地で一緒に何かを行ったりすることが重要だと思っています。そうした積み重ねが、地域医療の連携をより強固なものにしていくと考えています。

天願先生> 先生ご自身が離島でのご経験や、公務員として医療に携わる立場から、沖縄県医師会に対して、ご意見やご要望があればお聞かせください。

田仲先生> 先ほども触れましたが、コロナ禍においては、医師会の方々が一丸となって、さまざまな困難を乗り越えてきたという経験があります。そのことに対して、私自身、沖縄の医療に携わる一人として大きな誇りを感じました。

非常時だからこそ発揮できた、公立・民間の垣根を越えた連携や強みを、平時においても何らかの形で維持・構築していけるよう、医師会が中心となって「音頭取り」を続けていただければありがたいと思っています。

医療は、公務員だけ、あるいは民間だけで完結するものではなく、両者が一体となって初めて、継続的に維持していけるものだと考えています。その点について、今後も引き続きご尽力いただければと思います。

天願先生> わかりました。ありがとうございます。プライベートの話になりますが、先生の日頃の健康法についてお聞かせください。現在はご夫婦お二人で生活されているとのことですが、日常生活の中で心がけている健康管理のポイントなどがあれば教えてください。

田仲先生> 健康法として一番大切にしているのは、きちんと睡眠時間を確保することです。

私の場合、6時間の睡眠を取れないと、途端に調子が悪くなります。5時間半では足りず、必ず6時間は眠るようにしています。ただ、年齢を重ねると寝つきが悪くなることもありますので、「眠るために体を動かす」ことを意識しています。

夕方以降は予定が読めないことも多いため、朝の出勤をする前に体を動かすようにしています。そして、できるだけ21時に、遅くとも22時には床に就き、翌朝4時から5時頃に起きて24時間ジムで体を動かす、そうした生活リズムを心がけています。しっかり眠ることができれば、体調の不調だけでなく、人間関係などで気持ちが沈むようなことがあっても、「また頑張れる」と感じられるようになります。やはり、睡眠は何よりも大切だと実感しています。

天願先生> 続きまして、先生の座右の銘があれば、ぜひ教えてください。

田仲先生> 座右の銘として大切にしている言葉は、宮沢賢治の『農民芸術概論綱要』にある「永久の未完成、これ完成である」という一節です。

この言葉は、人は進化し続けるために、さまざまな変化を受け入れ、学び、創造し続けていく。その終わりのないプロセスそのものが完成である、という意味だと受け取っています。こ

の考え方は、人だけでなく組織をも豊かにするものだと思います。

私自身の座右の銘は何かと問われたとき、真っ先にこの言葉が思い浮かびました。

八重山病院も、これからの激動の時代の中で、さまざまな変化に対応していかなければなりません。「完成した形」を目指すのではなく、変化に応じて進み続けること自体が大切なのだと思っています。

天願先生> 初めてお聞きしましたが、素晴らしい座右の銘ですね。病院経営や医療の現場はもちろんのこと、私たち自身が日々を生きていく上でも、非常に示唆に富んだ、心に残る言葉だと感じました。

続いて、先生のご趣味について教えてください。

田仲先生> 趣味と呼べるか分かりませんが、基本的には映画鑑賞が好きです。最近はNetflixなどの動画配信サービスで、ドラマを家内と一緒に観る時間を楽しんでいます。自宅でゆっくり過ごすこと自体が、私にとっての趣味ですね。

また最近、旅行先で訪れた山口県の角島灯台がとても印象的で、明治時代に造られたレンガ建ての灯台に魅了されたことをきっかけに、「灯台巡り」にもはまっています。灯台という



のは、海の端や境界に、ひっそりと佇んでいる存在ですが、一つひとつ形が異なります。その造形美や機能性、そして歴史が一体となった姿に、強く惹きつけられています。

現在、登ることができる灯台は全国に16基しかありませんが、そのうち、あと5基ほどで制覇できるところまで来ています。全国でも達成者はまだ600人ほどだそうで、これも一つの楽しみとして続けています。

沖縄にも、登れなくても美しい灯台が数多くあります。

天願先生> 沖縄でのおすすめの灯台はありますか。

田仲先生> おすすめは宮古島の平安名埼灯台や沖縄本島では残波岬灯台が綺麗ですね。条件が良ければ2基とも登ることができます。天候次第で中止になることもありますが、事前にホームページを確認して、「今日は開いているな」と思った日に出かけています。学会や出張、旅行の際には、時間を見つけてその地域の灯台を訪れるのが、今の楽しみの一つです。

天願先生> 最後に、先生は奥様ととても仲が良いと伺っておりますが、いわゆる「夫婦円満の秘訣」のようなものがあれば、ぜひ教えてくださいいただけますか。

田仲先生> これを言っているのか分かりませんが、基本的には「夫婦は他人だ」と思っています。長く一緒に暮らしていても、「こんな考え方をするんだな」と感じることは今でも多々ありますし、それが面白いな、新鮮だなと思えるのです。「きつこう考えるだろう」と思っていると、全く違う方向から返ってくることもあります。だからこそ、分かり合えるはずだと思えないことが大切だと思っています。最初から「完全に分かり合える」と期待してしまうと、すれ違いやトラブルの原因にもなります。その代わりに、「自分はこう考えている」



P R O F I L E

職歴	
平成3年3月	自治医科大学医学部 卒業
平成3年5月	沖縄県立中部病院 勤務(初期研修)
平成5年5月	沖縄県立那覇病院附属阿嘉診療所 勤務
平成7年5月	沖縄県立中部病院 勤務(後期研修)
平成8年5月	沖縄県立那覇病院附属栗国診療所 勤務
平成11年4月	沖縄県立那覇病院附属阿嘉診療所 勤務
平成14年4月	沖縄県立中部病院 地域救命救急センター 勤務 沖縄県保健医療部(兼務)
平成21年4月	沖縄県立中部病院 地域医療科 部長
平成28年4月	沖縄県立北部病院 地域医療科 部長
平成29年10月	沖縄県病院事業局(兼務)
令和5年3月	東京医科歯科大学 医歯薬理工保健学専攻 医療管理政策学(修士) 卒業
令和5年4月	沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 副院長
令和6年4月	沖縄県立宮古病院 副院長
令和7年4月	沖縄県立八重山病院 院長

ということを、きちんと自分の言葉で説明するようにしています。

それが特別な秘訣かどうかは分かりませんが、そうした姿勢が、結果的に夫婦関係を穏やかに保つことにつながっているのかもしれない。

天願先生> いいお話を聞かせていただきありがとうございます。私も今後の参考にさせていただきます。

本日はお忙しい中、ありがとうございました。
インタビューアー：広報委員 天願 俊穂